ピエール・パスカル
『ロシア民衆の宗教』
翻訳の試み(6)

鈴　木　淳　一

Pierre Pascal

《La Religion du Peuple Russe》

translated by　J. Suzuki

これは「文化と言語」第55号（2001年10月31日)、第57号（2002年10月31日)、第58号（2003年10月31日)、第60号（2004年 3 月30日)、第61号（2004年10月29日）に掲載したピエール・パスカル著『ロシア民衆の宗教』(1973年）翻訳の続きである。今回取り上げるのは、前5回に引き続く第3部――第3部は6章から成っている――の1～4章である。

今回も前回同様、原注は「1、2、3…」と番号をふって脚注の形で示し、訳注は「(1)、(2)、(3)…」として章末にまとめて載せることにしたい。ただし、ごくまれにだが、訳注を便宜上［　］に入れた形で、本文あるいは脚注に直接組み込むこともある。

第3部
迫害に対するロシア民衆の抵抗

第1章　迫　　害

ロシアの教会は1917年以降ずっと迫害されてきた。この迫害は過去半世紀、かたときも止むことがなかった。それはただひたすら、流血を伴うものから抑止的な形式のものまで、法的手段に訴えたものから教育的な形式のものまで、あるいは宣戦布告的なものから侮蔑的な一時凌ぎ的なものに至るまで、手を変え、品を変えて続行されたのであった。こうした多種多様な方策は一斉に講じられたのだが、時期に応じてそれぞれの方策実施に強弱がつけられたために、迫害休止期と迫害実施期が交互に訪れているような印象が生じてしまうことになる。だが実際には、平和な時期など一瞬たりとてなかったのである。

この迫害は歴史上他に類を見ないものである以上、それをしっかりと定義づける必要がある。

フランスのコンブ内閣時代、あるいはドイツの文化闘争（クルトウアカムプフ）時代に行なわれた反教権主義的キャンペーンは、この際論外である[1]。過去数世紀の間に頻発したような、教会の権利と財産を国家の利益に還元しようとする政策もまた、ここでは問題外である。さらに古代ローマ帝国の何人かの皇帝治世下で生じたような、あるいは布教が行なわれた国々でもしばしば生じたような、暴力的だが短期間の危機もまた、ここでは問題にならない。

ソ連における迫害はまったく異質の事態なのである。ソヴィエト政府は政府独自の綱領、すなわちマルクス主義を奉じ、それを実践しようとする政府である。マルクス主義はあらゆる宗教を絶対的に否定する。かくしてこの政府は、1918年の憲法に「宗教的プロパガンダ、あるいは反宗教的プロパガンダの自

由は、全市民に認められている」と謳われているように、不偏不党を自称するときでさえも、マルクス主義者である以上は宗教そのものを破壊することを目的としているのである。この政府は、その国民から宗教的なメンタリティーを根こそぎにしようとするのである。この目的は、ソヴィエト政府樹立以来今日に至るまで、不変である。それは変更されることもありえなければ、放棄されることもありえない。しかもそれは、共産党によって承認され、宣言された目的なのである。

共産党と政府の間に設けられた区別はただたんに、政府が状況に応じてこの目的を達成するための最良の方針と手段を選択できるようにしているに過ぎない。

まず手始めに1918年、「分離」の掛け声の下、教会は政府からはもちろん、公共の場、教育界、ジャーナリズムからも締め出されたばかりか、動産と不動産とを問わず財産の所有も禁じられ、教会と礼拝に必要な品々は信徒の一時所有権に委ねられることになったのであった。私有礼拝堂には閉鎖処置がとられた。

宗教教育はすべての学校で禁じられたが、私生活でのそれは大目に見られた。

当然の成り行きとして、この政令に対する違反行為はすべて反革命的とみなされることになった。それに対して地方当局筋では、あらゆる種類の過激な措置が講じられ、教会の閉鎖、ないしは取壊し、貴重品の差押さえ、礼拝の妨害、司祭の不当逮捕などが始められたのであった。

1918年の12月、こうした過激な措置はいったん司法人民委員会[2]によって非難されたが、1919年3月と1920年8月にはその同じ委員会が、自ら通達を回して聖遺物崇拝を攻撃し、第一に聖遺物の入った箱の公開を、次にそれら聖遺物箱の博物館への移送を命じたのであった。それは、聖人の遺骸は不滅だとする信仰の無意味さを、それに加えて司祭たちの偽善性を暴き立てようとする作戦であった。それはつまり、礼拝に対する桎梏であり、民衆宗教に対する侮辱であった。

内戦は「反革命分子」の逮捕と粛清を促進させる絶好の機会を提供した。聖職者はすべて非労働者と同列とみなされ、その結果市民権を剝奪されることになった。したがって配給制時代の聖職者は、食べることも、着ることも、住むことも、自分の子供を教育することもほとんど不可能であったし、そもそも生きること自体がほとんど不可能であった。聖職者は市民権喪失者（リシェーネツ）［лишенец］階級へ叩き込まれてしまったのである(3)。

とはいいながら、宗教それ自体に対する宣戦布告はまだ行なわれなかった。新権力には、内戦の他にも対ポーランド戦争、経済復興、行政確立など、なすべきことが多く、イデオロギー問題に多くの時間を割いている暇などなかったのである。イデオロギー問題に着手されたのは、1922年末のことである。その年の12月には、もっとも著名な反マルクス主義的な思想家、あるいは作家が何十人とロシアから追放されている。それに続いて飢饉が激烈な反教会キャンペーンを展開するための下地を供給し、このキャンペーンは全体的な闘争へと変貌していったのだった。

ソヴィエト政権は、飢えた人々を救済するためには国外から小麦を買入れなければならないことを口実に、1923年2月26日、それまで教会に委ねられていた貴重品をすべて差し押さえるように命じた。2月19日以来、総主教は小教区の信徒たちに、そうした貴重品はすべて救済基金に供出するようにと呼びかけていたが、聖別された品々については例外とし、その引渡しを断固として禁じたのであった。信徒たち自身もまた、聖別された品々の引渡しに反対した。彼らは、神への冒涜を回避するために、そうした品々の対価支払いも辞さない覚悟であった。信仰を持つ民衆はそのとき自らの忠誠心を証明しようとしたのだが、その結果は反乱の頻発へと帰結することになった。中でもとりわけ大規模だったのは、3月15日にコストロマー県の小村シューヤで勃発した反乱であった。

3月19日にレーニンが政治局メンバーに宛てた短信は、こうした難局に直面した当局の真意がどこにあったのかを明らかにしてくれる。要するに、この書簡の言わんとするところはこうである。すなわち、我が国で食人行為すら行

なわれている現在こそ、国民の圧倒的多数と国外に住む我が国の敵対者たちに対し、「それなくしては政府の機能全般が、そしてとりわけ経済の構築など及びもつかない」、教会の保有する「数百万ルーブリの金貨を、あるいはもしかしたら数億ルーブリにものぼる金貨を我々が独占すること」を承認させる絶好の機会に他ならない。したがって、「いかなる反逆であれ、すべて容赦なく徹底的に壊滅させなければならない」。とくにシューヤの場合、可能な限り大勢を、「少なくとも数十人の」聖職者や職人、あるいは商人やブルジョワを逮捕しなければならない。そして「司法当局には口頭で、裁判が可及的速やかに行なわれるべきこと、かつその裁判は必ずや、シューヤのみならず、可能ならばモスクワ、およびその他の教会勢力の中心地においても、もっとも影響力があり、もっとも危険な反動分子の大多数に対する銃殺判決をもって結審すべきことを指示しなければならない」[1]。

シューヤでは8人の司祭と3人の平信徒が死刑を宣告され、26人が懲役刑を宣告されている。モスクワでは12人が死刑宣告を受け、またペテログラートでは8月12日に府主教ヴェニアミンが、修道院長一人と平信徒二人とともに銃殺刑に処されている。レーニンの指示が遵守された結果である。

時を同じくして、教会はまた内部からの攻撃にもさらされていた。ソヴィエト政府は、総主教チホンに対抗するために、「生ける教会」を自称する司祭グループを支持した(4)。このグループが宗教会議を招集し、総主教座の廃止を宣言し、主教や小教区信徒たちの心を捉え始める一方で、当局は従来の信仰に固執する聖職者たちを逮捕していったのである。こうして1923年の末には、66人の主教が投獄、あるいは流刑の憂き目に合っている。とはいえここでもまた政府の作戦は、やがて信徒たちの抵抗に遭遇してしまう。1925年4月7日に総主教チホンが逝去すると、その葬儀には69人の主教と膨大な数の民衆が参列している。対照的なのが教会改革派で、彼らは3派に分裂した後、やがては

[1] もしもこの短信がレーニン全集に収録されていないとしても、1964年版45巻666-667頁にはこの短信への言及がある。

再統合を遂げ、つねに政権を後ろ盾としつつ1927年までには公式教会になろうと努力したが、ついに果たせなかったし、民衆は彼らを見放してしまうからである。政府は二人の総主教代理を、すなわちピョートルとセルギーという二人の府主教を相次いで逮捕するが、その後セルギーを釈放し、彼に対して臨時宗務院の創設を許可したのであった(5)。

「教会復活同盟」はそれでもなお健在であった(6)。しかも府主教セルギーは、ソヴィエト政権に対する忠誠を謳った、ほとんど非常識とも言える過激な声明へ署名することを余儀なくされるが、この声明のために何人かの主教はセルギーへの服従を拒絶したのであった。ここから3つの司法管轄が生じることになった。現代的分派、合法的だが妥協的な正教、非合法存在に貶められた伝統的正教の3つである。政権は、教会本体の解体とヒエラルキーの粉砕に、まんまと成功したのである。

だが政権は、彼らが対峙している相手とは、虐待や買収が可能な百人前後の高位聖職者と数万人前後の司祭などではなく、どんな暴力でも限界ということを知らない数千万の信徒たちであるということを理解していた。現代的分派そのものも挫折が運命づけられていた。民衆は依然として正統的教会に忠実であり続けたからである。

やがて大々的なキャンペーンが計画される。それは、正統的教会の存在公認を目的としたキャンペーンだったが、その真の狙いは、より危険な非合法の宗教運動が拡大するのを回避し、教会を法という名のコルセットに嵌め込むことによって教会からあらゆる防御方法を剝奪すると同時に、間断のない多種多様な攻撃で責め苛むことによって教会を弱体化し、窒息させ、ついには完全に息の根を止めてしまうという点にあった。この目的は高らかに宣言された。つまり第一次5ヵ年計画が終了する頃、したがって1932年には、ロシアにはもはやただの一つの教会も残っていないはずだったのである。

1918年以来すでに試し済みの諸手段も、引き続き実施されている。司祭職からの離職が奨励され、そのための買収が行なわれる一方、影響力と熱意に富んだ司祭たちは逮捕され、収容所に送られた。教会は、とくに最大規模の教会

は、ある日突然、様々な口実の下に礼拝の対象から除外され、それからバリケードに囲まれて映画館か図書館か資材置場に変貌を遂げるか、さもなければ即座に取り壊された。クリスマスや復活祭のような祝祭日は、馬鹿騒ぎや侮辱的なプラカードを押し立てた仮装行列、あるいは若い共産党員たちの乱入によって妨害された。またどこかで、教会の鐘の原料である金属が工業用に必要との決定が下されると、いたるところで教会の鐘が取り外された。またある日どこかの無神論者が、ある村に住む人々か、あるいはある工場に働く人々がこぞって家庭のイコンを持ち寄り、持ち寄ったイコンをみんなの面前で焼いたらば、さぞかし立派な反宗教的信念の誇示行為となるだろうと想像したとなると、それこそいたるところで組織的なイコン焼却が実施されたのだった。こうしたイコンの処分についてはいかなる法的義務もなかったが、新聞雑誌の記事や指導者側からの発言、ことさらに重視強調された前例の引き合いなど様々な方法を通じて、歯向かうには並々ならぬ勇気を要する道徳規範が創り上げられていったのであった。家庭では、つまり夫婦間においては、あるいは親子間においては、どれほどたくさんのドラマが展開されたことであろうか！

その大半が同時に実施された、こうした宗教撲滅闘争の多様な措置について、それぞれに正確な実施日時を確定するのは至難の業であろう。

それとは対照的に一目瞭然なのは、1922年に大型週刊誌「無神論者（ベズボージニク） Безбожник」が創刊され、出版社「無神論者（アテイスト） Атеист」が創設されたこと、1924年に反宗教のラジオ局が開設されたこと、1925年に「戦闘的無神論者同盟」が結成されたこと(7)、1927年に科学的と称される雑誌「反宗教者（アンチレリギオズニク） Антирелигиозник」が創刊されたことである。さらに1928年になると、それまで公的には中立の立場にあった学校までが、無神論教育を義務化される。それは、自らの職務のみならず、自らの信仰に対しても献身的な男女の教師たちにとって、いかにも悲しい出来事だったに違いない！　無神論は、無神論博物館の解説つき見学、講演や会議、専門宣伝員養成のための長期短期様々な講座など、ありとあらゆる形で国民に叩き込まれていった。そして1930年には1600万部の反宗教的パンフレット、あるいは書籍が発行され、1931年には

「無神論者（ベズボージニク） Безбожник」の予約部数たるや、なんと500万部にも達したのだった。

こうした多様な反宗教的活動のために、科学という科学が動員された。天文学、古生物学、生物学、化学、医学、民族誌学、歴史学、等々、あらゆる学術分野が、つねに同一の結論を導き出すために利用されたのである。その結論とは、聖職者とは定見なき邪悪な搾取者、信仰とは基盤なき不条理なもの、秘蹟とは衛生の対蹠物、儀式とは魔術の名残、聖者伝とはたんなる伝説、キリストとはかつて存在したことのない架空の人物、何世紀にもわたるキリスト教の歩みは犯罪と悪逆非道の連鎖、というものである。福音書的な道徳自体も、階級闘争の対蹠物として蹂躙され、非難された。そして、知恵遅れの人々だけがいまだに信仰しうるのだということを頭に植えつけるために、あらゆる手段が講じられた。宗教はどんな場合でも、遺伝的欠陥か、あるいは恥ずべき疾病として、アルコール中毒や狂気と同列に論じられたのである。

宗教への攻撃は以上のようなものだった。では次に、追い詰められた敵に対する法律的な措置について見てゆくことにしよう。ここで言う法律とは、1929年4月8日に発布され、1931年1月16日付「訓令」と1931年2月20日付財務省通達によって補完された正式な法律のことである。

そこでは、同一の信仰を有する18歳以上の市民は、登録申請には20人以上を列記したメンバー一覧表を添えるという条件つきで、宗教団体を組織することが許されていた。登録が認められた場合、その宗教団体は挙手によって3人の責任者を選出し、礼拝を仕切る司祭とともに団体の全メンバーの一覧表を提出しなければならない。その後その団体は、契約を結ぶことによって、礼拝用の施設と道具の無料使用権を取得することができる。しかしその団体には、出廷する権利も、いかなる商業活動に従事する権利も（蠟燭を作る権利、あるいは宗教および道徳関係の書籍を出版する権利さえも）、相互扶助基金を備える権利も、諸々の集会を組織する権利も（読書のためであれ、手仕事のためであれ、宗教教育のためであれ、集会という集会を組織する権利も）、図書館を開設する権利も、医療活動に携わる権利も、一切与えられなかった。宗教団体

は、会費を徴収し、無償の寄付を受け取ることはできたが、そうした行為が許されるのはもっぱら団体のメンバー間においてだけのことであり、しかもその目的は礼拝のための施設と司祭とを確保することだけに限られていた。礼拝を取り仕切る司祭の行動範囲は、礼拝用の施設がある一定の区画に限定されていた。星の数ほどの条項が、どんな場合に宗教団体それ自体、もしくは礼拝用の施設が解消されなければならないのかを予め規定していた。それはたとえば、施設の補修が必要となった場合、宗教団体による礼拝用施設の維持管理が悪い場合、保険が支払われない場合、上層部の決定があった場合などであった。

この法律の文言は、教会とそのヒエラルキーに一切言及していない。そこにはただ、小教区関連のことがほのめかされているだけである。つまり、既存の宗教団体は1年以内に登録申請しなければならないというものである。中にはまた、あらゆる宗教教育があらゆる教育機関において禁じられていることに釘を刺すような条項もある。唯一、神学特別講座の開設が可能とされているが、その場合も「特別許可を得た上で、ソ連邦市民によって」開設されなければならないとされている。

この基本法の意義は、1929年5月22日の憲法修正案によって一層明らかにされた。第13条の「宗教的プロパガンダ、あるいは反宗教的プロパガンダの自由」という文言が、「宗教信仰告白と反宗教的プロパガンダの自由」へと変更されたからである。さらにその少し後には、次のような当局筋の注釈が付加されたのであった――「今後、宗教の代表者たち、もしくは教会の代表者たちのよって先導されたいかなるアジテーション、あるいはプロパガンダも… 法によって認められた信仰告白の自由の限度を逸脱するものであり… 刑法58条10項、および59条7項に… 抵触するものである… 宗教団体の活動は、礼拝の執行に限定されなければならない」。

このように、教会側からはあらゆる防衛手段が剝奪される一方、反教会活動についてはあらゆる措置が講じられている。そしてこうした体制に、教会は今でも［1970年代］依然甘んじ続けているのである。

1929年は、5ヵ年計画や工業化および集団化のキャンペーンとともに、迫

害が再燃し始めた年である。その年、信徒に対する新たな攻撃方法が考案されている。それは8月27日に宣言された、1週間休みなしの労働というものである。日曜日はもはや普遍的な休日ではないというのである。念の入ったことに、新聞はもはや曜日を表示しないことになる。日曜日にまったく仕事しないということは、法律違反であるばかりか、その人が信徒である目印となるのである。復活祭の夜には、労働者、学生、それに研究所や官公庁に働く人々が早朝祈祷や聖体礼儀に参加しないことを確実なものにするために、各種の祝宴や映画会、舞踏会や歌会があらゆる機関で開催された。そしてたとえそうした行事への参加が義務ではないとしても、無神論者同盟や労働組合委員会、共産党支部、共産主義青年同盟といった当局機関によって熱心に参加が促されたのである。司祭たちはかつてないほどの追及を受け、ただたんに食糧配給券と医療扶助を剝奪されるだけにとどまらず、公営住宅から締め出されてもいる。また司祭の収入には法外な課税がなされ、彼らの子弟は中学や高校から排除されたのだった。

教会の取り壊しにも一段と拍車がかかった。あちこちの地方ではほとんどの場合、集団化決議投票そのものが、送付された通達にしたがって、信徒たちの意見を斟酌することなしに、教会の別途使用を要求する事態となった。宗教的な施設に対しては重税が課される仕組みになっていた。宗教的施設は一片の土地も所有していないにもかかわらず、都市部では借りている部屋の広さに応じた不動産税が課されたし、地方ではトラクター購入の分担金と農産物の供出が義務づけられた。また都市部でも地方でも、報酬を支払うべき作者など存在しないにもかかわらず、歌われた曲に対する税金が徴収された。そして、もしもこうした諸々の税が支払われなかったり、施設の管理と補修がきちんとなされない場合には、施設の使用権に関する契約は破棄され、教会は閉鎖されることになったが、こうして教会を閉鎖に追い込むことこそ、当局の達成目標だったのである。

注意すべきことは他にもまだある。その一つは、1918年から1943年までの間、宗教関連書籍がただの一冊も印刷されなかったことである。一冊の教理問

答書も、旧約聖書も、聖者伝も、新約聖書も印刷されなかった。もう一つは、公共の場におかれていた宗教関連書籍が押収され、廃棄されるか、あるいはまた大きな図書館ではそうした書籍の貸し出しが禁止されたということである。ソ連邦では現在でもなお、福音書の輸入が禁じられている。

あまりにも行き過ぎた迫害もあった。1929年4月8日の政令による迫害がまさしくそうで、あまりに激しすぎたために、共産党中央委員会は1930年3月14日、「宗教的偏見撲滅運動において」突発的に生じた「許し難い逸脱」を、とりわけ「国民大多数の賛同なしでの行政的な教会閉鎖」を批判するはめとなっている。だからといって教会の閉鎖やその他の暴力行為が止むことは1932年末までなかったのだが、それでもなおかつ宗教はしぶとく存在し続けたために、第二次5ヵ年計画が終了する1937年には宗教の全面的な「撲滅」を再開しなければならなかった。1936年に発布された憲法は、「非労働者」、すなわち聖職者に対して政治的な権利を回復させはしたものの、宗教的な「プロパガンダ」についてはその禁止を再確認している。こうして1937年、やがては大粛清が訪れるだろうと期待される中、流血も辞さないありとあらゆる形式の迫害が改めて吹き荒れることになり、それは1941年6月にヒトラーがロシア攻撃を開始する日まで続くのである。

それ以来、迫害は再び緩和と緊張のそれまでとは違った局面を通過してゆくことになるのだが、そのことについてはここで詳述するつもりはない。キリスト教徒がどのようにして様々な迫害を切り抜けようとしてきたのかを検証する前に、キリスト教迫害に利用された方法を一つ一つ検討することだけで、私には十分だったからである[2]。攻める側も守る側も、ここで考察対象とした期間

[2] ここでは、非常に信頼性が高くてバランスの取れたニキータ・ストルゥヴェNikita Struveの著書『ソ連邦におけるキリスト教徒たちLes Chrétiens en U.R.S.S.』（パリ、1963年）を大いに利用させてもらった。ジョン・スケルトン・カーティスJohn Skelton Curtissの『ソ連邦における教会（1917年〜1956年）Die Kirche in der Sowjet Union (1917-1956)』（ミュンヘン、1957年／英語原著、ボストン、1950年）もまた参考にしてかまわないが、情報量が豊かである反面、ソ連当局に対して寛大過ぎるきらいがある。同じように、ポール・B・アンダーソンPaul B. Andersonの『ソヴィエト・ロシアにおける教会と国家L'Eglise et la nation en Russie soviétique』（パリ、1946年）

内に、その方法という方法のほとんどを試してみたのであった。

第3部第1章「迫害」 訳注

(1) コンブ大統領（1835-1921）は、1902-1905年の在職期間中に、反教会政策を打ち出し、政教分離を唱導した。また「文化闘争 Kulturkampf」とは、ドイツ初代宰相ビスマルクが1871年に着手した反カトリック運動のこと。

(2) 「司法人民委員会」は le commissaire à la Justice の翻訳である。この仏語を露語に訳せば Комиссариат правосудия とでもなるのだろうが、そうした委員会があったかどうかは不明。もしかしたらこれは、1918年12月に創設された「連邦革命軍事裁判所 Революционный военный трибунал Республики」のことかもしれない。

(3) リシェーネツ（лишенец）とは、1936年のスターリン憲法制定以前のソ連で、搾取階級に属しているとの理由で市民権を剝奪された人のこと。

(4) 総主教チホン（1866-1925）は、伝統的宗教擁護の立場に立って、ソヴィエト政府と対立し、1922年に逮捕された。また「生ける教会（Живая церковь）」とは、1923年に結成された分派のことで、従来の宗教的な規制や典礼の改革を目指し、ソヴィエト政府への適応を図った。

(5) 総主教チホンの死後、政府は新しい総主教の選出を禁止し、チホンが指名した総主教代理の府主教二人、ピョートルとセルギーを即刻逮捕した。府主教ピョートルは1925年12月にシベリア流刑に処されている。

(6) 「教会復活同盟 Союз церковного вескресения」は「生ける教会」と並ぶ、教改革を目指す分派の一つ。

(7) 「戦闘的無神論者同盟 Союз воинствующих безбожников」は、「無神論者 Безбожник」友の会だった「ソ連邦無神論者同盟 Союз советских безбожников」を前身として発足した自発的な民衆組織。

もまた、一貫して迫害者側を弁護している。さらにルネ・マルテル René Martel の『ソ連邦における反宗教運動（1917年-1932年）Le mouvement antireligieux en U.R.S.S. (1917-1932)』（パリ、1933年）も、決然たる態度でソヴィエト政府に肩入れしている。デルビニ猊下 Mgr d'Herbigny の二つのパンフレット『反宗教闘争 La guerre anti-religieuse』と『ソヴィエト・ロシアにおける反宗教統一戦線 Le front qntireligieux en Russie soviétique』（パリ、1930年）は、1929年クリスマスの「キャンペーン」と1930年4月～11月の「キャンペーン」を取り上げている。「ロシアとキリスト教徒 Russie et Chrétienté」誌（ドミニコ会センター「イースチナ（真理）」）1935年9月号105-53頁に掲載された論文『ソ連邦における宗教感情 Le sentiment religieuse en U.R.S.S.』は、ソ連出版物からの抜粋を数多く収録している。

第2章　ヒエラルキーの対応

迫害に直面したとき、教会はどのような対応をしたのであろうか？

まずはヒエラルキーの対応である。総主教チホンは1918年、迫害を非難し、迫害に対する防衛を呼びかけ、抵抗の綱領を提示した。そして1922年には再び聖器没収に異議を唱えている。翌1923年6月28日には「イズヴェスチヤ」紙上に、彼の名前で前言撤回声明が、いわば現体制を政治的に承認する旨の声明が公表された。しかしこの声明のテクストは総主教逮捕中に作成されたものだったため、世論がその声明の中に読み取ったのは強制された転向だけであり、それまでの異端排斥に関する世論の思い出が払拭されることはなかった。

こうした不退転の姿勢はまた、総主教が自らの後継者に指名した府主教ピョートルのものでもあった。1925年12月23日のピョートル逮捕後にこうした姿勢を引き継いだのは、無神論を標榜する政権との妥協は教会に対する背信行為であり、信仰に殉じた無数の主教や司祭、信徒に対する否認行為だとみなす、ヒエラルキー内の一部の人々であった。もっとも、たとえ妥協するとしても、相手が宗教の根絶を目指す政府であってみれば、どんな妥協にも効果など期待できなかったであろう。こうして結局彼らは、迫害と向かい合いながら、教会のために地下生活を甘受し、神の摂理に縋りつくことしかできなかったのである。

その反対の立場に立つ主教たちもいた。彼らは、体制への服従政策をとれば、そのことによって教会の存在が一時的にせよ合法化され、礼拝と聖職者が存続可能となり、キリスト教徒の大量確保が容易となり、よりよき時代の到来を待つことができるようになるはずだと期待していた。総主教代理の府主教セルギーはこの方針を採択し、この方針をぎりぎりの線まで貫徹しようとする一方で、公式的には迫害の事実はおろか、不当な教会閉鎖の事実さえも否認している。しかもほどなくして彼は、スターリンとルィコフからじきじきにこの否

認を虚言として非難されている[1]。

迫害に対する対応のこうした二つの流れは、ヒエラルキーの全階級にくまなく浸透していた。司祭や信徒の中には、ピョートルに忠誠を誓い、セルギーのために祈ることを拒否する者もいれば、セルギーの名に言及するのは良しとしながらも、ピョートルとその後継者たちの思想的同志を自称する者もいたし、またセルギーの追随者たちもいた。1929年から1933年にかけて襲った殲滅運動の大波の中、最初に姿を消したのがピョートル派の教会だったのは、当然の帰結である。存続しえたいくつかのサンクチュアリは、あたかも偶然の悪戯であるかのようにセルギー派のものばかりであった。

ある意味では、「政治的な」思惑が勝利を収める形となったわけである。そしてその思惑は、1943年以来ずっと適用され続けてゆくことになる。セルギー自らが総主教の座に上り、正教会はもはやソヴィエト政府の一部と化してしまう(1)。強硬派は、確かに消滅してしまうことはなかったが、非合法な存在とされ、地下生活を余儀なくされたのであった。

ところで、今日までキリスト教を存続させるのに最大の功績があったのは、どのような理念なのであろうか？

セルギーの政策理念を支持する人々は、彼の外交術がなかったならば、キリスト教のひとかけらも残らなかったろう、つまり再建のよすがとすべき土台のようなものは何一つ残らなかっただろうと断言する。新しい総主教セルギーと彼のあとを襲ったアレクセイの手腕がなかったなら、ソヴィエト政府をして、第一に少数の神聖な場と司祭を生き長らえさせるようにすることもできなかったし、現在教会が意気揚揚と享受している「自由」を教会へ返還させるようにすることもできなかったであろう、と言うのである。

この問題に答えるのは生易しいことではない。この問題をめぐっては、国内の正教徒はもちろん、亡命した正教徒たちもまた二派に割れている。いずれに

[1] 宗教問題担当常設中央委員会の官報でさえも(2)、反宗教的な過激行為の存在を認め(1932年、第2号)、それらの過激行為を地方当局の責任に帰している。

しても今は、迫害に直面したときのヒエラルキーの動きではなく、民衆の動きについて事前調査の矛先を向けるべきときであろう。

第3部第2章「ヒエラルキーの対応」 訳注

(1) 1943年9月4日にスターリンが国家と教会の関係を正常化すると、同年9月12日には総主教代理だったセルギーが総主教に選出されたのだった。

(2) 「宗教問題担当常設中央委員会」は la Commission central permanente des cultes の翻訳であるが、これはおそらく「ソ連邦中央執行委員会幹部会付属宗教問題店頭常設中央委員会 Постоянная центральная комиссия по вопросам культов при президиуме ЦИК СССР」のことだと思われる。

第3章　受身の対応？

迫害に直面したとき、ロシアの民衆はまず何よりも、唖然とするほどの、スキャンダラスとさえ言えるほどの受身的な姿勢を示したように見える。彼らはいかなる反乱にも、いかなる抵抗にも訴えなかった。

こうした印象は有無を言わせないほど絶対的なものである。だが実際は、決して新聞雑誌で報道されることはなかったとはいえ、地方ではあれこれの反乱が起こったのだった。1922年、教会の聖器が没収されたときには、1414件の反乱があったことが公式記録として残っている。小教区の信徒たちは、自らが通う教会の閉鎖、あるいは破壊に抵抗したが、その抵抗の件数は永遠に謎のままであろう。無益であるが、無益であるがゆえに一層勇猛果敢なこうした抵抗はすべて、流血とともに鎮圧されたのであった[1]。

しかしながらこの受身的な対応という印象は、全面的に間違っているわけではない。この受身的対応は、ロシア人の心性にかなっている。すなわち、権力の前に額ずき、外面的かつ肉体的には服従するが、その一方で自分の意見や感情、精神的姿勢をあくまで手離さないというロシア人気質に、ぴたりとそぐうのである。筆者はかつて、モスクワの人々がイベリアの生神女マリアやカザンの生神女マリアのイコン、あるいは救世主キリスト寺院といった、彼らにとってもっとも崇敬するサンクチュアリの破壊されるのを、外見上は無表情に見物しているのに出くわしたことがある。彼らは、外見上は無関心を装いながら、彼らにとってもっとも神聖な品々を断念したのである。彼らは洗礼の十字架をその身から外し、家庭のイコンを火にかけたのである…　そして彼らは、モスクワの真ん中に「宗教は民衆の阿片である」という有名な文句が掲示されるこ

[1] アンダーソンの前掲書では（80-81頁）、小村キムルィでの抵抗が引き合いに出されている。

とを黙認し、日曜日の廃止に、復活祭、あるいはクリスマスという聖なる日々の労働に、そして小教区内教会の映画館あるいは食堂への改築に、諸手を挙げて賛同したのである…

しかしながら、以下の事実だけは声を大に言っておかなくてはならない。すなわち、上述した迫害はいずれもまったく民衆の意を汲んだものではなかったということである。聖職者の誰かが路上で暴行されたとか、あるいは愚弄されたという噂など、絶えて聞かれることはなかった。その証拠に、聖職者たちはいつでも僧侶の服装で自由に歩き回ることができたのである。教会の祭式を妨害するための乱痴気騒ぎは、強制的に編成され、仕込まれた若い共産党員たちのグループにこそ相応しいものであった[2]。教会の閉鎖にしても、民衆がそれを望んだことなど一度もなかった。たとえ教会閉鎖が、県庁所在地から派遣されたアジテーターを前にして震え上がった市町村議会による「満場一致」という投票の結果だとしても、民衆は教会の閉鎖を望みなどしなかったのである。民衆に加えられたそうした暴力の事実については当局側もしばしば認めているが、さらにはスターリンも 1930 年 5 月 2 日の演説「成功の眩暈」の中でその事実を認めたのであった。

民衆はまた、様々な分派の煽動者たちにも追随しようとはしなかった。「生ける教会」に残ったのは、ほとんど幹部たちだけ、すなわち僅かな生粋の信徒たちだけであった。アンダーソンは彼らについて、それは「敬虔な女性たち、あるいは農民の集団というよりも… 野心に燃える聖職者たち」だったと記している（前掲書、102 頁）。

民衆は、信仰を捨てない限り、総主教チホンに率いられた正統的な教会に忠実であり続けたのである。

あるいはこう言ったほうがより適切かもしれない。すなわち、もしも民衆に焦点を絞るなら、1922 年 2 月 2 日に「イズヴェスチヤ」紙の記者によって描き出された次のような状況こそは、はるかに持続的にして普遍的であったはず

[2] この事実はマルテルによって確認されている（前掲書、72-74 頁）。

だ、と。記者は書いている――「我が国の地方において、自宅にイコンを飾っていない共産主義者を見つけ出す可能性は、万に一つもない。宗教と共産主義はまさしく理想のカップルなのである。だからこんなことが生じる。ある村である共産主義者が結婚する。婚礼の行列はそっくりそのまま教会へ赴く。行列の先頭には、『万国のプロレタリアートよ、団結せよ！』と書かれた赤旗が掲げられ、その後に諸々のイコン、赤いリボンを胸にかけた花婿、等々が続く。こうした赤に彩られた結婚式は、地方では珍しくもなんともない。農民たちは共産主義とソヴィエト政権を自己流に解釈している。彼らはソヴィエト政権をこよなく愛しており、ソヴィエト政権のために神に祈るほどである。ヴォロネシ地方の大きな村であるチハンカでは、全共同体がこぞって主任司祭に対し、十月革命の記念日に戦死した赤軍兵士のための追善供養を執り行なうよう要求したことがあった。その際、主任司祭は要求に同意したのみならず、追善供養の儀式を閉じるにあたって、その地方の共産党委員会に敬意を表する略式礼拝まで執り行なったのであった。またザドンスク地方の町、スタールィ・ドゥボヴォイでは、主任司祭が赤い星を身につけ、レオニート・アンドレーエフの戯曲『サッワ』の一場面を演じて見せてさえいる(1)。周囲の農民たちはその主任司祭を『赤の司祭』と名づけている」。

このように、共産主義者たちにおいても、共産党綱領が彼らの感情を圧殺してしまうまでは、教会への敵意など存在しなかった。ましてや民衆には、教会への敵意などありようがなかったのである。フランス革命期、あるいは1830年代のフランスに生じた事態に類するようなことは、一切なかったのである。

以上が事実の一面である。だがそれは徹頭徹尾ネガティブな事実である。それでは、信仰の堅固な持続性を裏づける、よりポジティブな痕跡を検証することは可能であろうか？

受動性はときとして、比類ないほど大胆不敵な信仰告白と共存できないものではない。これから取り上げる例は修道女たちを扱っているが、修道女が民衆にきわめて近しい存在であってみれば、これは一から十まで民衆伝統に連結した例なのである。

第3部第3章「受身の対応？」 訳注

(1) レオニート・アンドレーエフ（Леонид Николаевич Андреев, 1871-1919）はロシアの作家。人道主義的リアリズムの作風で出発し、次第に象徴主義的作風に変わっていった。『サッワ Савва』は、1905年12月のモスクワにおける武装蜂起に触発され、1906年に発表された戯曲。奇蹟を起こすと言われるイコンにすべての不幸からの脱却を祈願する暗愚な大衆が、そのイコンを奴隷根性のシンボルとして破壊しようとして失敗したマクシマリスト、サッワを八つ裂きにしてしまう様子を描いたこの作品には、民衆による専制打倒の可能性に対する作家の疑惑が色濃く投影されていると言われる。

第4章　殉教者たち

ここで要約して紹介するのは、ソロヴェツキー島に流された一人の老人の話である。彼は次のように語っている。

1929年の夏、我々は30人ほどの修道女が島に上陸するのを目撃しました。我々はいくつかの手懸りから、彼女たちの大部分がシャモルヂノからやってきたと結論づけました。シャモルヂノはオプチナ荒野修道院にほど近い、トルストイが妹に面会を求めて訪問したことで広く知られる修道院です。

彼女たちが収容所に入るや否や、ある異常な事件が発生しました。収監の登録手続きの際に彼女たちは、姓名、父称、誕生日、出生地、学歴、職業、賞罰といった型通りの質問に答えるのを拒絶したのです。彼女たちはただ、マザー・マリヤ、マザー・アナスタシヤ、マザー・エヴゲニヤ、等々といった洗礼名しか名乗りませんでした…　脅そうがすかそうが、彼女たちからは何の情報も得られませんでした。彼女たちは独房に入れられ、断食、断水、不眠など、もっとも苛烈な責苦にさらされ、激しく鞭打たれもしました。だがそれでも彼女たちが屈することはありませんでした。

さらに悪いことには、彼女たちは労働も拒絶したのでした。

それからまもなく私は、もう一人の囚人医者と一緒に、保健衛生課長のところへ召喚されました。課長は我々に修道女たちを検診するよう要請するとともに、彼女たちに対する労働不適格の宣告が待ち望まれていることを理解させようとしました。いったんそう宣告されさえすれば、彼女たちの労働放棄を合法的に免罪できるし、規律も損なわれないで済むからなのです。保健衛生課長は我々に言いました――「彼女たちは狂信者だ。殉教が望みらしい…　マゾヒズム病者なのだ…　だが気の毒だ…　黙々と鞭打たれるときの彼女たちのうっとりした表情と謙虚さを、私は見るに忍びなかった…　しかもそれは私一人に限ったことではない…　ヴラヂーミル・エゴローヴィチ（収容所所長）もそう

なのだ。あの方も事態の収拾を望んでおられるのだ。だから、もしも君たち二人が彼女たちの労働不適格性を認めてくれれば、彼女たちには平安が約束されることになるだろう」。

私の連れは要請を断ったので、私は単身で修道女たちの検診に出かけました。彼女たちは品位に溢れ、物静かで落ち着いており、着古されて継ぎ接ぎされてはいても、清潔な黒い衣服を纏っているのが見て取れました。彼女たちは総勢30人ほどで、お互いによく似ていました。全員30歳前後に思われましたが、そこにはもちろんもっと若い女性も、もっと年のいった女性もいたに違いありません。彼女たちは誰もみな、あたかも選抜された人々のようでした。適度にふくよかで、がっしりとしていて均整がとれ、健康そうで清らかなその姿は、どんな害虫のどんな噛み痕もない白い茸を思わせました。要するに彼女たちは、かの詩人が次のように歌ったロシア美人だったのです——

「彼女は疾駆する馬を見事に抑え止めもすれば、

燃え盛る百姓屋の中へと身を躍らせもする」[1]。

彼女たちの表情には、押し殺された慎ましやかな苦悩の色が滲み出ていました。彼女たちを目の前にして感じることができたのは、賞賛と憐憫の情だけでした。

面会に立ち合うべき役人は、私にこう言いました——「あんたらの邪魔をしないように、私はここから出てゆくとしよう」。彼はチェカー［反革命運動・怠業取締委員会］の要員でしたが、修道女たちから発散される純潔と謙虚の精神に心を動かされたのです。私一人が彼女たちのもとに取り残されました。

私は丁重にお辞儀しながら言いました——「修道女の皆さん、こんにちは」。

彼女たちは返礼として、上半身全体を深々と折り曲げました。

「私は医者です。私がここへ派遣されたのは、あなた方を検診するためです」。

何人かの声が私の話を遮りました——「私たちに病気の者はおりません。私たちを検診するには及びません」。

「私は信徒であり、私もまた信仰のために逮捕されたのです」。

新たに何人かの声がしました――「ありがたいことです！」[2]。

「困っておいでだと思います。私には皆さんを検診するつもりなどありません。ただ不調な個所があったら、教えてください。皆さんの労働適正レベルを決めさせていただくためです」。

「私たちはどこも悪くありません。いたって健康です」。

「しかし、もしかしたらとくにきつい労働を割り当てられるかもしれないのですよ」。

「私たちはいかなる労働にも従事いたしません。重労働でも、楽な労働でも同じことです」。

「どうしてですか？」。

「反キリストのために働くつもりなど毛頭ないからです」。

「何ですって？　でもここには信仰のために流されてきた主教や司祭も大勢いますが、その誰もが各人の能力に応じて働いているのです。たとえばヴャトカの主教ヴィクトルなどは、製網所の会計を担当しています。漁業の分野では多数の司祭が働いています。彼らは魚網を編んでいるのです。これは使徒たちの仕事なのです[3]。彼らは金曜日に夜を徹して働きますが、それは、翌日の仕事を早めに切り上げ、土曜の夜と日曜の朝を自由に過ごすためなのです…」。

彼女たちの中の年長者が厳かに答えました――「そうした人々のことは存じ上げません。誰を非難するつもりもありません。でも私たちは私たちです、反キリストの権力のために働く気はありません」。

「そういうことであれば、私としては、検診なしであなた方全員の診断書を作成し、そこに重労働不適と書き込むことにいたしましょう…　全員を第２カテゴリーに分類するというわけです…」。

「いいえ、そんなことはなさらないでください。さもなければ私たちはいずれ、あなたが真実を記入しなかったことを白状せざるを得なくなるでしょうから…　私たちには働く能力はあっても、反キリストのために働く気はないのです。たとえ殺されることになろうとも、働く気はないのです」。

私は心を痛めながらも、我々の会話が立ち聞きされるのを恐れて、ごく小さ

な声で言いました――「殺されはしないでしょうが、諸々の責苦にさらされることでしょう」。

一番若い修道女が、同じように声を低めて言いました――「神さまが責苦に耐えるお手伝いをしてくださいます」。

それから一週間すると、診療所に収容所の所長がやってきました。

「ほとほと手を焼かせられたな、あの修道女たちには！　…それでもなんだな、四の五の抜かしながらもやっとのことで働くことに同意してくれたよ。今では診療所のために蒲団を縫ったり、刺繍したりしてくれている。もっとも自分たちだけのやくざな暮らし方を構えて、一緒に寝起きし、仕事の合間に詩篇を蚊の鳴くような声で歌っているがね…　そんな生活ぶりが許されてしまったんだな」。

修道女たちはまったくの孤立状態におかれていたので、我々は長いこと彼女たちのことを何も知らないでいました。我々が新しい情報を入手したのは、それから一ヵ月も経ってからのことでした。

次々とやってくる輸送船の一艘で、以前これら修道女たちの中の数人の聴罪司祭だった男がソロヴェツキー島へ連行されてきました。すると修道女たちは、万難を排し、まんまと彼との接触を果たし、彼の指導下に身をおくことに成功したのでした。

彼女たちが彼に伝えたのは、おそらくこういうことだったに違いありません。すなわち、自分たちがここにいるのは、苦しむために他ならない。しかるに自分たちは快適に暮らしている。一つに寄り添い、詩篇を歌い、心の命ずるままに働き、病人のために蒲団を作ったりしている。これまで反キリスト体制のもとで働くことに同意してきたが、果たしてそうした自分たちの行動は正しかったのか？　現在従事している労働さえも拒絶した方がよいのではなかろうか？

聴罪司祭はその返答として、労働の絶対的禁止を命じました。こうして修道女たちは、あらゆる労働を拒絶してしまったのです。

当局側は、こうした事態がどうして惹き起こされたのかを知っていました。

その司祭は銃殺刑に処されましたが、その死を知らされたとき、修道女たちはこう言ったのでした――「今となってはもはや、この世の誰一人として、私たちをあの方の労働禁止令から解き放つことはできません」。

彼女たちは他の囚人たちから切り離され、人知れぬ地へと連れ去られてしまいました。八方手を尽くしてみましたが、それ以後彼女たちに関する情報は一切耳にすることがありませんでした[1]。

このエピソードが教えてくれるのは、情熱的この上ない信仰心、峻厳この上ない道徳心、そして昔ながらのロシア魂の実践（宗教的師父に対するその死後までの服従）というものが、1929年にいまだ健在だったということである。この堅忍不抜な受動的抵抗が、チェカー要員の尊敬を誘わずにはいなかったのである。

また1930年かその少し後には、ソロヴェツキー島へ流された148人のイエスという名の熱狂的崇拝者たちの問題も持ち上がっている(4)。彼らは、1913年に抑留されたアトス山の修道士ではないかと思われるが、反キリストに奉仕しないために、労働することはおろか、その氏名を明かすことことさえ拒んだのであった。彼らは全員、十字を切ることができないように両手を後ろ手に縛られたまま、銃殺刑に処されている[2]。

これまで紹介したのはすべて、修道女と修道士たちである。だがその気になれば、同様の堅忍不抜さの例はまた、平信徒たちの間にも見つけ出すことができるだろう。ロシア正教会は、こうした年月にあっても、殉教者に事欠くことなどなかったからである。

---

[1] かつて筆者はこの話をもっと完全な形で、マレドスのベネディクト会修道士の雑誌「精神と生 Esprit et Vie」（1949年8月号、388-393頁）に発表したことがある。それは、アメリカ合衆国で出版されているロシア語雑誌「正教国ルーシ Православная Русь」（1949年8月29日号）から借用したものである。その後、パリの雑誌「ロシア思想 Русская мысль」（1950年4月12日号）においてアリアドナ・トィルコワ＝ヴィリアム Ariadna Tyrkova-Viliams がこの話の一部を確証している。

[2] M. ニコロフ＝スモロヂン M. Nikorov-Smorodine、『赤い収容所 Le bagne rouge』（ソフィア、1938年）。

エリノール・リッペもまた、何年もの収容所生活において日曜と祝祭日の労働を拒み、飢餓と鞭打ちを耐え忍ぶ道を選んだ修道女たちに関する著書の中で、こう語っている――「彼女たちは体罰を加えられもしたし、スカートを頭の上まで捲り上げられもした。お互いの髪の毛が縛り上げられてしまうこともあった。だが何の効果もなかった。次の日曜日がくると彼女たちはまた、いつものように粛々と、悪びれもせずに毅然として、独房へ戻されてゆくのであった」。

いったいどれほど多くの無名の殉教者たちが、信仰のために苦しまなければならなかったことか！　その数と偉業については、神のみぞ知るである。たとえばここに、夫との奇跡的な再会を果たしながら、その後再び収容所へ送られた若いウクライナ女性がいるが、彼女が収監されたのもまた主の日［日曜日］に対する崇敬の念ゆえであった。さらにまたここに、信仰を捨てることよりも監獄から監獄へとたらい回しにされる道を選んだ老婆がいるが、彼女は護送される馬車の中でこう呟いたのであった――「いまや私はキリストさまとほとんど同じぐらい苦しみました。私はまもなく救われることになるでしょう」[3]。

信仰のために投獄された信徒の近親者たちが、投獄された人々の訊問調書コピーや拷問記録をうまい具合に入手できることも、たまさかあるようである。こうした現代の殉教者伝はその数を増し、信徒たちの秘密会合で朗読されている。ウファでは1928年、森林産業局の秘書だったリヂヤとかいう女性が、こうした殉教者伝を何種類かタイプ写本したが、そのために今度は彼女が逮捕の憂き目にあったのだった。彼女に対する拷問はあまりに目に余るもので、見かねた警備兵の一人キリルが拷問刑吏二人を射殺してしまうほどであった。そしてキリル自身もまた殺されてしまう。このニュースは後にアレクセイという別の兵士によって流布されたのだが、アレクセイもまた殉教者としてその生を終

[3] これら二つの事実は、エリノール・リッペ Elinor Lipper の著書『ソ連収容所における11年間 Onze ans dans les bagne soviétiques』（パリ、1950年、73-75頁）から借用したものである。リッペはこれらの事実についでに言及しているだけである。というのも彼女は宗教関連事項に対して特別な関心を寄せているわけではないからである。

えたのであった[4]。この金メッキされた伝説はあまりに麗し過ぎて、あえて信じる気にはなれないし、この伝説の信憑性を裏づけることもまた困難である。だが、だからといってどうして、実際にそれに類した事実が存在しないなどと言い切れるであろうか？

第3部第4章「殉教者たち」 訳注

(1) この詩の一節は、ネクラーソフの長詩『赤鼻マロース Мороз, красный нос』(1863) 第1部「ある百姓の死」4節12連3－4行目からのもので、典型的なロシア農婦の美しさ、機敏さ、人情の厚さ、大胆さを歌っている。12連の原文は以下の通り ——

В игре её конный не словит,	戯れに馬上の男に追われても掴まらず、
В беде — не сробеет, — спасёт:	災いが襲いきても、少しも怯まず、人助け。
Коня на скаку остановит,	疾駆する馬を見事に抑え止めもすれば、
В горящую избу войдёт!	燃え盛る百姓屋の中へと身を躍らせもする！

ついでに第4節全体をここに訳しておこう。

Однако же, речь о крестиьянке	それでもここでひとつ
Затеяли мы, чтоб сказать,	農婦の話をするとしよう。
Что тип величавой славянки	今もなお偉大なスラヴ女の典型を
Возмжно и ныне сыскать.	見つけられることを明かすため。

Есть женщины в русских селеньях	ロシアの村々には今もまだ、
С спокойною важностью лиц,	落ち着き払った厳つい顔をし、
С красивою силой в движеньях,	一挙手一投足に力を漲らせ、
С походкой, со взглядом цариц, —	足取り、眼差しは女王といった女たちがいる。

[4]「正教国ルーシ」(1949年、12号、7頁) 参照。リヂヤの生涯と上述した三重の殉教については、後年、ザハロフ B. Zakharov がパリの雑誌「ロシア思想」(1950年、3月21日号、4-5頁) において、詳細な情報を大量に駆使しながら (リヂヤは司祭長の娘であること、彼女を唆したのはウファの大主教アンドレイ・ウフトムスキーАндрей Ухтомский であること、彼女の逮捕状況、等々)、説得力豊かに報告している。

Их разве слепой не заметит,	盲人でさえその女たちに気づかずにはいず、
А зрячий о них говорит:	目明きはその女たちについてこう語る ——
«Пройдёт — словно солнце осветит!	「歩き行く姿は、輝く太陽の如し！
Посмотрит — рублём подарить!»	その視線は、人を惹きつけて止まず！」。
Идут они той же дорогой,	その女たちが歩みゆく道は
Какой весь народ наш идёт,	誰もが通る道と同じだが、
Но грязь обстановки убогой	ひどい泥濘の泥はといえば
К ним словно не липнет. Цветёт	彼女らにはくっつく様子なし。
Красавица, миру на диво,	世界もうっとりするほどの美女ぶり。
Румяна, стройна, высока,	頬赤く、すらりと背は高く、
Во всякой одежде красива,	何を着てもあでやかで、
Ко всякой работе ловка.	どんな仕事も見事にこなす。
И голод, и холод выносит,	飢えも寒さもものとはしまい。
Всегда терпелива, ровна...	つねに我慢強く、平常心…
Я видывал, как она косит:	かつて彼女が草刈するのを見たが、
Что взмах — то готова копна!	鎌を一振するや草山一丁できあがり！
Платок у ней на ухо сбился,	スカーフが耳までずれ下がり、
Того гляди косы падут.	今にもお下げがはみ出しそう。
Какой—то парнёк изловчился	どこかの若者がこっそり近づくと、
И кверху подбросил их, шут!	ふざけてお下げを上に跳ね上げた！
Тяжёлые русые косы	重々しい金髪のお下げは
Упали на смуглую грудь,	浅黒い胸へと落ちかかり、
Покрыли ей ноженьки босы,	裸足のかわいい足を覆い隠し、
Мешают крестьянке взглянуть.	彼女の視線を遮った。
Она отвела их руками,	彼女はお下げを手でかき分け、
На парня сердито глядит.	その若者をきっと睨みつけた。
Лицо величаво, как в раме,	その顔は肖像画のように厳しく、

Смущеньем и гневом горит...	当惑と怒りに燃えていた…
По будням не любит безделья.	彼女は日々を無為に過ごすのを好まない。
Зато вам её не узнать,	けれど、ひとたび喜悦の微笑が
Как сгонит улыбка веселья	顔に刻まれた労苦の影を消し去るとき
С лица трудовую печать.	そこには誰も知らない女が現れるのだ。
Такого сердечного смеха	その腹蔵のない笑いも、
И песни, и пляски такой	その歌も、その踊りも、
За деньги не купишь. «Утеха!» —	金では買えない代物。「ああ極楽！」——
Твердят мужики меж собой.	農夫たちは口々にそう言い交わす。
В игре её конный не словит,	戯れに馬上の男に追われても掴まらず、
В беде — не сробеет, — спасёт:	災いが襲いきても、少しも怯まず、人助け。
Коня на скаку остановит,	疾駆する馬を見事に抑え止めもすれば、
В горящую избу войдёт!	燃え盛る百姓屋の中へと身を躍らせもする！
Красивые, ровные зубы,	その美しく、粒揃いの歯は
Что крупные перлы у ней,	つぶらな真珠さながらだが、
Но строго румяные губы	きりりとした赤い唇がその美しさを
Хранят их красу от людей —	人々の目から覆い隠している。
Она улыбается редко...	彼女は滅多に笑わない…
Ей некогда лясы точить,	彼女に無駄口を叩いている暇はない。
У ней не решится соседка	隣の女も彼女には鍋掴みさえ、
Ухвата, горшка попросить;	土鍋さえ貸してと言い出しかねる始末。
Не жалок ей нищий убогий —	みすぼらしい乞食さえ憐れまない。彼女には
Вольно ж без работы гулять!	働きもせずにぶらつくなど言語道断なのだ！
Лежит на ней дельности строгой	彼女には骨の髄まで確たる実務の才と
И внутренней силы печать.	芯の強さが刻印されているのである。
В ней ясно и крепко сознанье,	彼女ははっきりしっかりと知っている、

Что всё их спасенье в труде,	自分たちの救いは労働にしかないことを、
И труд ей несёт воздаянье:	労働は彼女に報いてくれるがゆえに、
Семейство не бьётся в нужде.	家族が貧窮に喘がなくて済むことを。
Всегда у них тёплая хата,	彼女の家族にはいつでも暖かな家があり、
Хлеб выпечен, вкусен квасок,	パンが焼かれ、美味しいクワスがあり、
Здоровы и сыты ребята,	子供たちは健康で腹も満ちており、
На праздник есть лишний кусок.	祝日には一皿余計にありつける。
Идёт эта баба к обедне	この農婦は家族の先陣を切って
Пред всею семьёй впереди:	聖体礼儀へと出かけてゆく。
Сидит, как на стуле двухлетний	彼女の胸には、椅子に座るかのように
Ребёнок у ней на груди,	二歳の子供が抱かれている。
Рядком шестилетнего сына	そしてこの着飾った母親は隣に
Нарядная матка ведёт...	六歳の息子の手を引いている…
И по́? сердцу эта картина	ロシア民衆を愛する人は誰でも
Всем любящим русский народ!	こんな情景が心から好きなのだ！

(2) 「ありがたいことです！」の原意は、「神が褒め称えられますように！ Dieu soit loué!」。これはロシア語の Слава Богу を仏訳したものであろう。

(3) 使徒のペテロとアンデレは漁師であった（「マタイ伝」4章18節）。

(4) 「イエスという名の熱狂的崇拝者たち adorateurs du nom de Jésus」とは、「イミャスラーフツィ Имяславцы」のこと、つまり20世紀初頭にアトス山のロシア正教修道院で生まれた正教神秘思想「イミャスラーヴィエ Имяславие」の信奉者たちのことではなかろうか（「イミャスラーヴィエ Имяславие」は、「名 имя」と「栄光 слава」を連結した造語で、「名を褒め称える」という意味だから、無理に訳せば「賛名論」、「褒名論」、「賞名論」、「称名論」などあれこれと考えられるが、桑野隆氏は「賛名」と訳している。このことについては フロレンスキイ『逆遠近法の詩学』、水声社、1998年、301-375頁所収の「哲学的前提としての賛名 Имяславие как философская предпосылка」を参照のこと）。この神秘思想の教義は、「神の名は神であるが、神そのものは神の名でも、いかなる名でもない」というものである。この教義は言葉によって再現される理念の客観的現実から出発し、「イエス」という言葉を発する主体は神人の理念およ

び人格とのリアルな精神的影響関係へと参入することを主張する。この教義を巡る論争の口火を切ったのは、スキマ修道僧イラリオンが『カフカスの山中で』を出版し、そこでイエスの祈りの霊験あらたかさとイエスという名の神性について語ったことであった。この神秘思想はその汎神論的傾向を批判されるとともに、その教えは神を神そのものと神の名に二分割し、神そのものではなくて神の名を崇拝するものとして指弾された。1913年に宗務院はこの神秘思想を異端とし、この神秘思想の擁護運動を反逆とする声明を出しているが、それは正教宗教思想における存在論の衰弱と、当時の政治状況に媚びた教会指導部による教会内部の宗教的諸問題に対する官僚的対処を裏づけている(現在のロシア正教会は「イミャスラーヴィエ」を正統な宗教思想と認めている)。こうして「イミャスラーヴィエ」は弾圧されることになるが(ただし、かりにパスカルが言及しているのが「イミャスラーフツィ」のことだという鈴木の推測が正しいとしても、ソロヴェツキー島流刑と銃殺の件については不明)、思想自体はその後も神学と宗教哲学の世界において練磨されていった。この神秘思想を擁護し、展開した有名な思想家としては、パーヴェル・フロレンスキー(Павел Флоренский, 1882-1937)、セルゲイ・ブゥルガーコフ(Сергей Булгаков, 1871-1944)、ヴラヂーミル・エルン(Владимир Эрн, 1882-1917)、アレクセイ・ローセフ(Алексей Лосев, 1897-1988)などがいる。